

古田悦造先生の思い出

古田悦造先生 思い出の記

1979年修了 原 芳生

このたび古田悦造先生が定年により退職されることになり、いろいろとお世話になった感謝の気持ちを込めて、先生との思い出を綴ってみたいと思います。

私が古田先生(実際には「古田さん」とさん付けで呼ばせてもらっていますが)とお付き合いをさせて頂くようになったのは、1974年からです。古田先生が学芸大学地理学教室の修士課程に入ってこられ、私が1学年下の学部の4年生になった時です。同じ大学の田辺さんと一緒に2人で入学されましたが、地理学に対してはとても熱心な方々で、巡検などにも積極的に参加されすぐに学芸地理の水に慣れていかれました。暫くするとなぜか古田先生は髭を蓄えられるようになり、私たち同期の学生の間では、「髭の古田さん」と呼ばれるようになりました。

同期では私一人が大学院に進学したため、その後2年間いろいろと御一緒させて頂くことになりました。臨地研究や巡検、コンパ等のいろいろな機会に寝食を共にしながら、諸々のことながらを教えて頂きました。さらに、古田先生は東久留米の雄迎寮に入寮され、私は近くの保谷市(現在は西東京市)に住んでいたため、夜遅くに寮の部屋にお邪魔して話し込み、研究の邪魔をしたりしていました。

当時はまだ地理学教室にゼミというものがなく、講義以外に自主的に学生や院生が一緒になって勉強するという雰囲気はありませんでしたが、古田先生が音頭を取って専門の分野に関係

なく取りあえずみんなで自主的に勉強しようと、数人の院生と学生で図書館で勉強会(地理ゼミ)を始めました。

学芸大学で修士課程を終えられた古田先生は、開学間もない筑波大学の博士課程に進学されたわけですが、東久留米の寮から筑波のアパートへ引っ越しする時に、お手伝いをするようになりました。レンタル料金が安いからと、夜中にレンタカー(ワンボックスカー)を借りて往復しました。寮では積み込みの手伝いはたくさんありましたが、筑波では誰も知り合いがおらず、ドライバーの私と古田先生(免許がない)で部屋に運び入れざるを得ませんでした。高速料金は高いのと夜中は交通量が少ないということで、一般道で往復したため、かなりハードな引っ越し作業だったのを記憶しています。

その後は筑波と小金井・アメリカと離れてしまい接する機会が少なくなりましたが、古田先生が学芸大学に着任されてしばらくしてから私



世田谷・丸品仏にて(1976年5月)
最後列一番右が古田悦造先生。
最前列右から2人目が小栗宏先生。
岩本廣美氏提供

が帰国したので、またお会いすることが増えました。職もなく身分が定まらない私を心配して、科研費調査の手伝いとして雇っていただいたり、非常勤講師の仕事を譲ってくださったりといろいろと手助けをしてくださいました。

その後も地理学教室にお世話になっていたのので、結婚されて大泉学園の官舎に移られた古田先生を、時々官舎まで送って行っては奥様に歓待して頂いてご馳走になりました。最初のお子様が生誕された時には、直後でまだ病院の新生児室にいる時に、初めてのお子さんでさぞ嬉しかったので、自慢げに「赤ん坊を見に来ない」と誘われてお供させていただきもありました。

さらに近年は、私の大学へ非常勤講師で教えに来て頂いています。私のゼミの学生は、古田先生の授業の後に誘われて「さくら水産」でご馳走になっているようです。有り難うございます。とにかくいろいろとお世話になっているばかりです。退職されてからもさらに一層の活躍を期待してやみませんが、健康にだけは十分にお気をつけください。お酒やたばこはほどほどに。

寮生活の思い出

1978年修了 中本 彰

古田先生がめでたく御退職を迎えられるとお聞きし、今から40年前に先生と同じ寮生活を送った頃の思い出を述べさせていただきます。

私は鳥取県の高校から東京学芸大学への合格を決めたのですが、入学手続きと同時に学生寮への入寮を願い出ました。あの当時は学生自治が当然で、入寮選考は大学当局ではなく、寮生からなる「入寮委員会」が一切の決定権を持っていました。私が入寮したのは東久留米市にあった「雄迎寮」で、附属養護学校(現在は特別支援学校)を見下ろす林の中に5階建ての建物が

ありました。一室4名で、2階から5階に各12室、計192名の定員でしたが、実際には一室2名、合計100名ほどの寮生が暮らしていました。

1972年(昭和47年)の入寮当時は、家賃に当たる寮費が一ヶ月300円、燃料費(風呂用ボイラー)が150円、そして毎日の朝食80円、夕食120円だったと記憶しています。ですから寮生は一ヶ月6000円弱で生活することが出来ました。

そんな寮生活を送っていた3年生の春休みだったでしょうか、寮委員をしていた鹿児島県出身の友人U君が「ちょっと君の意見を聞きたい。」と言って、私の部屋を訪ねてきました。彼の相談というのは「地理学専攻の大学院生が入寮を希望しているのだが、どう思う。」という内容でした。本来は学部学生のための寮なのですが、5年生とか6年生が暮らしていましたし、そもそも定員に余裕があったのですから「断ることはないだろう。」という結論に至りました。入寮委員会もそれで了承となり、3月末に学部1年生に先んじて入寮してもらいました。引越作業で一番驚いたのは先生の「蔵書の多さ」でした。私など4年間で100冊ほどの文庫本と神田の古書店街などで入手した地理学専門書をふくむスティール本棚1個分でした。ところが古田先生は“ブリタニカ百科事典”全巻・・・これがあるときの地震で崩れ落ちたのですが・・・を始めと



久留米・上総松丘駅線ホーム(1976年6月)

3列目右から3人目が古田悦造先生
岩本廣美氏提供

する本、本、本でした。その時、「大学院に進むにはこれほどの読書量や蔵書が必要なのだ。」と感じ、自分など見習おうにも無理なこととあきらめにも似たものを感じました。私も大学院に進みましたので、隣室同士の寮生活は2年間におよびました。地元のスナックに連れて行ってもらったり、名古屋・栄のご自宅を訪問してご家族のご歓待を受けるなど、40年前の日々を懐かしく思い出します。

「青い時代」 ～古田悦造先生との思い出～

1982年修了 石飛 一吉

古田先生との出会いは、今から40年前に遡る。当時、大学院博士課程の古田さん(助手時代には「先生」と声を掛けると、「君の先生じゃない!」と甲高い声でたしなめられたが…。よって土浦時代は「さん」づけ)と私は、茨城県土浦市でそれぞれアパート暮らしをしていた。理論派であり、大胆で緻密な研究で知られる古田先生の片鱗(失礼)は、土浦の「青い時代」からあった。この頃の二人の共通点は、ヘビースモーカーだった。相違点は学識と食文化と酒量。下戸な私をいつも介抱するのは古田さんの役だった(本当に申し訳ない)。そんな古田さんを市内で探すには、飲み屋をのぞけば事足りた。なぜだか土浦時代の古田さんの思い出は、私の中では「冬」で、大家さんの離れにあたる部屋は、いつも足の踏み場もないほどの本と資料であふれかえっていた。青いパッケージのハイライトの箱と吸い殻でいっぱい灰皿、小さな炬燵に毛玉だらけの青いセーターに身を包んで背中を丸くした古田さんがいた。いつも無精の二人にとって、夜中にタバコがなくなると吸い殻は貴重な「補給品」で、ほぐして巻き直して吸った。

そんな古田さんからは、「日本民俗学」への転身を志していた私に、文献の読み方や図の描き方、地理学の最新理論(「ふんっ!そんなもん教

えてない」と言われそうだが…)など初歩から教えてもらった。自己流で身近に先輩といえる人のいない環境の中、よく議論もしたが、多くのことを学ばせて頂いた。とくに、「歴史地理学」に関する知識の乏しい私にも、学問的すばらしさを熱く語って下さった。時には、他の研究室の大学院生だった福島義和さん(現、専修大学教授)や奥井正俊さん(現、宇都宮大学教授)、さらに途中からは小口千明さん(現、筑波大学教授)、小野寺淳さん(現、茨城大学教授)なども加わって議論がエスカレートしたこともあった。

その後、古田さんは助手として東京学芸大学に赴任され、同じく私は日本民俗学から地理学への「出戻り学生」として籍を置くこととなった。「一番やりにくい人間」がくっついて来たと言っても過言ではないだろう。教員としての職務を遂行する上で、学生「時代の諸相」「時の断面」を知る者の存在ほど、やっかいなものはない。私も逆の立場だったら、そう思う。大御所の大勢いる地理学教室では、ゼミ室や資料室で二人になると、少し歳の行った私に何かと声を掛けて下さった。当時、「サンシャイン」への移転計画が進行中で、助手としての古田先生の活躍ぶりのご苦労は並大抵のものではなかった。



筑波・筑波山にて(1978年6月)

最前列が古田悦造先生

右から5人目が青木栄一名誉会員

岩本廣美氏提供

初対面には、多少とも人見知りされる古田先生は、当時、若い学生たちからは少し煙たがられたかも知れないが、本当は今と同様、心優しき指導者である。

ただ、私が勤めてから後、研究室を訪ねたとき(夕方6時半を過ぎた頃)、おもむろに「ちょっと呑もうか?」と言って部屋の本と資料をかき分けて床に座られた。「つまみでも生協で買って来ましょうよ」と尋ねると、「いいよ、つまみはあるから」と言われ、机の上から梅干し2個と韓国のり1パックを出された。これで十分という顔をされて。私にはとてもついて行けない感覚だが、どこかの金銭にまみれた商業上の「おもてなし」ではない、これが古田先生流なのである。これは、古田先生の研究姿勢と同じであり、派閥や出身・学閥に囚われず飾らない態度、潔癖なまでに純粋な研究姿勢が古田先生なのである。これは大いに学ぶべき態度・姿勢であることは疑いがない(ただ、これから3時間、ただただ空腹の中の飲酒は、私にとって厳しい

ものがあつた)事実である。

末尾になりましたが、長い間、本当にありがとうございました。今後の古田悦造先生のさらなるご活躍とご健康を祈念致します。



筑波・ガマランド駐車場にて(1978年6月)

真ん中が古田悦造先生
岩本廣美氏提供



辻本芳郎先生退官記念会にて(1978年2月)

後列左から4人目が古田悦造先生

前列右から2人目から宮地忠明名誉会員、一人おいて竹内淳彦先生、有井琢磨先生、市川健夫名誉会員、青木栄一名誉会員、北村嘉行先生。後列、右から5番目白坂蕃先生、その左上野和彦名誉会員。

岩本廣美氏提供

お通し、冷ややっこ、小金井桜

1985年修了 田村 穰

古田先生、御退職おめでとうございます。そして長い間の東京学芸大学勤務お疲れさまでした。私のような不出来な人間が先生の手記を書くのは大変気が引けたのですが、後輩たちの熱意に負けてしまい筆をとることにしました。

先生が筑波から学芸大学に来られたのは、確か1980年。山鹿先生のご退職に伴い着任されたと記憶しています。私は学部の3年生で、卒業後1年都立高校の講師を務め、その後大学院に行きましたので計5年間にわたって歴史地理ゼミや卒論そして酒の席と、公私ともお世話になりました。

当時先生は独身でした。お酒が好きで(今も変わられないと思いますが)、研究嫌いながらも酒好きの私とは、酒を浴びるほど酌み交わしました。場所はきまって、武蔵小金井北口仲通り商店街の「みつや」です。カウンターだけの店で、先生は決まって隅をキープしていました。200円のお通し、190円の冷ややっこ、そして名酒「小金井桜」を1000円台でキープできる数少ないお店でした。ゼミのある日は歴史地理ゼミのみなどと、ない日は、あてはお通しとやっこのみでマスターと談笑しながら、時の経つのを忘れて飲み続けていた記憶があります。その中で、「本を読め」「フィールドワークをしろ」などと、今の自分に通じる大切なことを、毎日のように示唆いただきました。

時には「田村君来ないか」と無理矢理、小平の下宿(古田邸)に誘われました。「まあ座れ」と言われたものの、新聞や学術書、そしてカップラーメンの殻が雑然と堆肥のようになりうずたかく積まれています。周辺をかき分けてなんとか座ります。先生が日本酒を出し、「田村君コップをとってきてくれ」と言われたものの、キッチンシンクにはカビを培養したコップの数

々。泣く泣く食器洗いを。そのうち先生は、すやすやと・・・その穏やかな寝姿を横目にしながら、そっと自分の下宿に帰ったものです。

そんな、古田邸に一大転機が訪れます。ある日同じように古田邸を訪れると、そこは別宅でした。履きそろえられた靴。整然と片づけられた書籍。そして食器の数々。そして、見知らず女性が一人。初めてお会いした奥様の姿でした。それ以降お宅におじゃますることがめっきり減ったのは言うまでもありません。

現在私は、山陰海岸ジオパーク鳥取砂丘を校区に持つ中ノ郷中学校に勤務しています。実は私の卒論は鳥取砂丘から東に伸びる砂丘につきょうで有名な福部村岩戸漁港(現 鳥取市)を扱ったものでした。そのときの直接の指導教官は、助手であった古田先生。車を走らせ福部町へ行くとき、先生の言うことをうまくのみこめず提出した卒論のことを思い出します。今から思えば稚拙な内容であったと甘酸っぱくほろ苦い記憶がよみがえります。

しかし、古田先生ほか学芸大学地理学教室で学んだことは定年間近の今となって役に立っています。校区内にある旧街道筋を辿ってみたり、古戦場跡を歩いてみたりしながら手記を書いたり。地理学の素敵さを今更ながら痛感する毎日



佃島・住吉神社にて(1985年3月)

一番右が古田悦造先生

2列目座っているのが青木栄一名誉会員・右から3人目が河崎省吾名誉会員、前列右から4人目が白坂蕃先生、最後列一番左が加賀美雅弘先生。

岩本廣美氏提供

です。

古田先生もお体を大切にされ、第二の人生を謳歌されることを祈念しております。

母に対して先生に謝らせた不肖すぎる弟子

1992年卒業 坂田 宏之

中藤淳先輩や川澄正幸先輩、天野宏司君や私、その少し下くらいまでは、古田先生とにかく思い切り叱られた世代だろう。大学4年生の時、叱られたことは今も印象に残っている。

近世の街道の研究をしたくて入ったはずの大学なのに煮えきらない私。先生の研究室で思い切り叱られた。「おまえはいったいなにをやりたいのだ!」と、そして江上波夫『日本民族と日本文化』を渡されたように思う。騎馬民族の渡来と弥生文化の形成を考察するスケールの大きい研究はすばらしいとは思った。しかし当時の私は父からの「研究などで飯が食えるのか?」という言葉に対して、明確な反論をできず、悩んでいたのだった。とにかく家を離れたかった。

そんな中、父と大喧嘩をして夜中に家を出た。そして大学プール門近くのまだ陸軍技術研究所時代の兵舎を利用していた、通称サークル長屋の地理学研究部室や友人たちのところに泊まり



菊地利夫先生の喜寿お祝い会にて
(1993年)

中央が古田悦造先生・左端が菊地利夫先生
小野寺淳氏提供

ながら、1週間家に連絡もせず帰らなかったことがある。携帯電話の普及していない時代だから、家との連絡の遮断も容易にできた。母は当然心配した。自然史ゼミの青木賢人君にも連絡がたって、彼からも「おまえ、帰れよ」と諭された。しかしそれだけでなく、母は古田先生の研究室にも電話したのだ。当然古田先生にも帰るよう叱られた。さすがにそれで私は帰った。今も古田先生と酒を飲む機会があり、先生が酔ってこられると必ず言われる。「おまえのお母さんに『息子を帰してください』といわれて、俺は謝ったんだぞ」と。全くひどい迷惑を先生におかけしたものだと思う。おそらくこれから一生、私は先生に言われ続けるのだろう(笑)。

このとおり、私は古田先生の不肖すぎる弟子である。大学院も受けたが落ち、そんなところに白坂蕃先生経由で紹介された、たましん地域文化財団に入ることができ、以来『多摩のあゆみ』という郷土誌の編集や資料室の資料整理を主な生業としている。そんな関わりから、この『学芸地理』古田先生ご退職記念特集の編集を手伝わせていただいた。しかし、これも中藤先輩がご存命であれば、私など出る幕ではなかったように思う。天野君とふざけて「古田先生になにかあったら、一番弟子の中藤さんが葬儀委員長、川澄さんが弔辞、天野は祝辞(笑)、山田志乃布さんは泣き女、坂田は清めの席の下足番」と、よく話していたのだから。

大学を卒業して24年、歴史地理学ではないが、20年以上裏方として仕事をしてきた東京都無形文化財の芸能団体「説経節の会」で、明治・大正・昭和にかけての説経節台本90点ほかという、まとまった史料に出会えた。これにしっかり向き合うことで、やっと地域史を通して、古田先生にいただいた学恩に報いることができると感じている。大切にしたい。

古田先生と私

1994年卒業 岡本 明子

K 類日本研究を1994年に卒業しました。古田先生は指導教官でもあり、歴史地理ゼミと卒業論文でも大変お世話になりましたが、私は先生のお蔭で卒業できたと言っても過言ではありません。80年代の浮かれたドラマを栃木の片田舎で見て育った私はずっと、大学は遊びに行くところと信じていました。学芸大学を選んだのも、秋休みがあり他大学より休みが長い、東京にあるし、たくさん遊べそうだという非常に不純な理由でした。そんな学生でしたので、古田先生は指導に大変ご苦労されたと思います。そしてそんな私も卒業論文を書くことになりました。

当時、私の趣味は浮世絵を見て回ることだったので、手ぬぐいか浮世絵で論文を書きたいと古田先生に相談しました。すると古田先生はそんな生ぬるい論文では卒業できないと私を諭し、あなたの出身地にちょうどいい研究材料があるから、それを調べてみてはどうかとアドバイスをくださいました。そして私は夏休みと秋休みを使って地元の旧家に通い、江戸末期の地域の戸籍を一頁ずつ撮影してフィルムを大学へ持ち帰り、なんとか卒業論文を書き上げました(通婚圏についての仮説を実証するものでした)。いま改めて思えば大した調査ではないのですが、根が不真面目な私にはその地道すぎる作業がなかなかの苦痛でした。しかし、休み明けにフィルムの山を見た古田先生が本当に喜んでくれたのを覚えています。またその後の卒業論文発表会では、全て一人で調査をしたということを他の先生方が大変驚いて下さいました。その時の古田先生の得意気な顔も忘れられません。

しかし、同期の卒業論文はどれも簡単なレポートのようなものでした。ある人の卒業論文が彼の大好きな松田聖子の歌詞の研究(というよ

りもあれは感想文)だったことが非常に衝撃的でよく覚えています。そんなポエムのようなものでも学芸大学は卒業できるんだ、まったく古田先生に騙されたと思いました。浮世絵の研究では君島和彦先生のゼミになるので、歴史地理ゼミの人員を一人でも多く確保したかったのかもしれない。しかしとにかく古田先生は、私のような不出来な学生にも、匙を投げずに根気強く指導して下さいました。あれから二十数年の間には、きっと私のように、古田先生のお蔭で卒業できた学生もたくさんいることと思います。本当に感謝しています。私のような教え子を代表し、改めてお礼を申し上げます。



学位記授与式にて(1994年3月)

岡本明子氏提供

地理を学び続けることに思う

2000年3月卒業 栗山 絵理

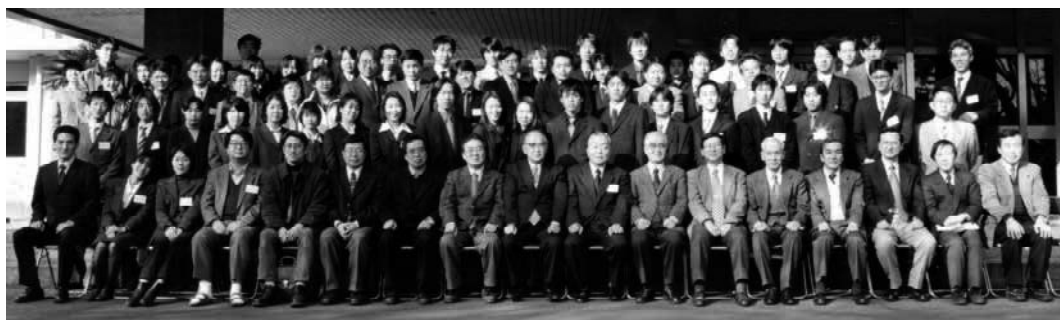
古田悦造先生に歴史地理ゼミにてご教授いただき始めた大学3年生から、早くも17年の歳月が経とうとしています。当時の日本研究は、3年次から専門を決め、所属するゼミを選ぶという仕組みでした。将来、高校の教員を志して地方から上京してきた私は、1・2年次の大学の一般教養の授業に感動を覚え、専門を持つことが楽しみでもありました。歴史学・地理学・民俗学・人類学・宗教学・教育法…さまざまな授業がある中で、「歴史地理」や「地誌」という分

野は自分自身の世界の見方や考え方に最もじっくりときて、授業を受けるたびに関心が増していったことを覚えています。

私は現在、附属高校で地理の教員をしています。私が地理を専門として志した背景には、古田先生に出会ったことが強烈に影響しています。1つは、毎回の授業が特に興味深かったこと。空中写真から歴史的な遺構を発見する授業やフィールドワークを通じて身近な地域の歴史的な背景を自分の五感で獲得する授業、地方出身者が多いことを活かして方言地図を導入にして地理的な視点を養う授業など、主体的に考察した授業は今でも鮮明に思い出されます。また、無理を言って地理学教室の臨地研究にも参加させてもらい、研究成果をまとめる際には古田先生にご助言をいただいたことは忘れません。もう1つは、歴史地理ゼミを通じて触れた古田先生のお人柄です。先生はお酒と中華料理が大好きで、ゼミの後には大学近隣のお店によく連れて行って下さいました。この時間は「第二のゼ

ミ」であり、地理学に関する重要な事柄をご教授下さる時間でもあり、毎度のように顔を出していました。ゼミには韓国や中国からの留学生も多く、日本に居ながらにして留学しているような気分にもなりました。また、大学4年生の時には、ウォーラーステインの近代世界システム論について英語で講読する授業も経験し、地理を学問として習得する厳しさも学びました。学会や研究会にも学生をよく連れて行って下さり、他大学の先生を紹介して下さいることも多く、学問の先端に触れる機会を得ました。

私が教員として勤めて10年が経過しました。古田先生は1980年から東京学芸大学にご勤務されているとのこと。優に35年の月日をもって地理学を支えて下さいました。私もまだまだ古田先生の背中を見ながら、地理を学び発信し続けたいと志を新たにしました。古田悦造先生、本当にありがとうございます。御恩を決して忘れません。



第48期 卒業論文発表大会にて(2000年2月11日)

前列, 右から4人目が古田悦造先生

その左隣が, 河崎省吾名誉会員, 小泉武栄先生, 斎藤毅名誉会員, 竹内淳彦先生, 青木栄一名誉会員, 上野和彦名誉会員, 山下脩二名誉会員, 矢ヶ崎典隆先生, 加賀美雅彦先生・高橋日出夫先生・椿真智子先生・中村康子先生

関 信夫氏提供

古田先生との思い出

2005年卒業 藤野 翔

古田先生とは、2003年度からお付き合いをさせていただいています。現在、カリフォルニアの日本人学校に勤務をしているため、ご退職記念祝賀会には参上できないせぬが、一言お祝いを申し上げさせていただきます。

私が、歴史地理ゼミに足を運ぶようになったことのきっかけは、当時、東京学芸大学の3年生のゼミ選択をしなくてはならなかったことです。それ以来、毎週水曜日のゼミの活動では、夜遅くまで歴史地理分野に関するを中心に、様々な面で指導していただきました。

ゼミの活動で思い出されるのが、外国人留学生との交流です。当時の歴史地理ゼミは、日本人の学生よりも、外国人留学生が多数を占める環境でした。その出身地は、韓国、福建省、内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区におよび、とりわけ韓国人が多数派でした。その中で古田先生は、留学生一人一人に対して、歴史地理に関する指導以外にも、日本の文化や言語に関しても丁寧にご指導されていました。古田先生は、どんな境遇のゼミ生にも、分け隔てなく親切に接していたのが印象的でした。

他にも、古田先生の学生想いの様子を表す思い出として、毎年行っていたゼミ巡検が思い出されます。山梨県勝沼町(現 甲州市)と静岡県静岡市を訪れた巡検では、宿舎や移動中の電車の中で、ゼミ生全員と何度もトランプゲームをして親睦を深められていました。また、途中で訪れた静岡県由比町(現 静岡市)では、ゼミ生と一緒に自転車を借り、年の差を感じさせない軽快な動きで旧東海道由比宿から薩埵峠まで運転されていました。

さらに、韓国のソウルとプサンを訪れた巡検では、学生の負担する費用のことを第一に考えられ、安価な夜行列車と一泊約1,000円という

安宿を予約していただき、一緒に移動・宿泊してくださいました。その巡検では、ことあるごとに韓国人留学生もしくは留学生と関わりのある教授と行動を共にし、日本人学生と韓国人留学生の交流を積極的に進めていただきました。

今思い返すと、歴史地理ゼミでの古田先生は、ゼミ生に学問の内容や方法だけを指導するという立場ではなかったように感じられます。積極的にゼミ生と交流することを通じて、指導範囲は社会人としての礼儀・作法や異文化交流の分野にまで及んでいました。

大学を卒業してからも、古田先生とお付き合いは続きました。他大学の大学院に進学して歴史地理ゼミから離れた私を、古田先生は折々気にかけてくださいました。当時、古田先生は歴史地理ゼミの卒業生に対して、現役ゼミ生の発表や巡検がある毎にメールを送ってくださいました。そのおかげでゼミ生と卒業生、または卒業生どうしの交流が盛んに行われました。

歴史地理学会の大会・例会に足を運んだ際には、席をご一緒する毎に、研究分野に関するご指導を賜りました。時には他の歴史地理学会員とともに会場を移して、夜まで親睦を深め、研究談義を繰り広げてくださりました。また、学会で研究発表をした日には、学生の私を気前よくホテルに招いてくださり、様々なご助言をくださいました。歴史地理学会での古田先生からのご指導は、修士論文を作成する際の大きな指針になりました。

大学院を修了し、教員になってからもお付き合いをさせていただいています。当時私の勤務地だった鎌倉に学生を連れて来ていただき、一緒に巡検を行いました。神戸での学会の際には、深夜7時間かけて、一緒に同じ車で東京に帰宅したことが思い出されます。

古田先生との思い出は限りないですが、それらに一貫していることがあります。それは、ご

自身が指導した学生やゼミ生に対して、何年経っても温かい眼差しを向けてくれていることです。ご退職おめでとうございます。



ソウル・伽倻観光ホテルにて(2006年1月)

右から3番目が古田先生。
山田 友索氏提供

「ロボットじゃない」

2006年卒業 山田 友索

「山田、今日は良かったよ。」

そう声を掛けて頂いた瞬間、それまでの感謝やら苦労やらいろいろな感情がこみ上げ、涙が吹き出しました。卒業式の日、日本研究での謝恩会が終わった後、幹事だった私を先生が労ってくださった場面でした。泣きながら先生と固い握手を交わす中で、もう一つの場面の記憶が蘇ってきました。

4年生の11月頃だったでしょうか。歴史地理ゼミで、卒論の途中経過を発表した後のこと。先生が、

「今日の発表は良かったよ。自分なりの分析ができていた。」

と声を掛けてくださいました。この一言がどれだけ嬉しく、自信になったことか… それだけ、私はそれまで卒論で苦悩していました。

3年生後期、興味のあるテーマはあったものの、研究にするための具体的な方法が見出だせないうちにいました。先生からも指摘を受けていたのですが、頑固に「思い」だけで構想発表会に臨んでしまいました。終わった後、見るに見か

ねた先生からとどめの一言。「テーマ変えろ」と。代わりに先生が与えてくださったテーマでやることになりました。

しかし、最初のうちは(大変失礼ですが)「やらされてる」感が強く、主体的に取り組むことができていませんでした。それを見通していらっしやっただけでしょう。ゼミでの発表の後、「やきとり大吉」に向かう道で、先生から掛けられた言葉が…

「ロボットじゃないんだから、ちゃんと自分の頭で考えろ。」

というものでした。そのうえで、研究方法の大きなアイデアを授けてくださいました。

それからというもの、意識が変わり、研究を自分のものとして主体的に取り組むことができるようになりました。そうして、11月についに褒めて頂いたのですから、それはもう嬉しかった訳です。

こうして思い返してみると、先生は本当によく学生のことを見て、考えてくださっていたのだと思います。言いたいことはきっと山ほどあったろうと思いますが、できるだけ学生が自分で考えるよう、ギリギリまで我慢されていたのだと思います。そして、ここぞというタイミングで大事なことを簡潔に伝える。

これは、日頃から学生のことをよく見て、考えていないとできないことです。それ故に、私の中で先生の言葉が今でも強く胸に残っているのだと思います。

社会人になって10年、自分で判断しなければならぬことが格段に増えました。そんな今、先生からの言葉が改めて大きな意味を持つようになりました。苦しい状況から逃げたくなるとき、あの言葉が浮かびます。でも、もう先生に言わせてはいけません。だから、自分で自分に言います。

「ロボットじゃない。自分で考えろ。」と。

Congratulations on your retirement!

2007年修了 Jiasuer Mijiti

Dear Mr. Furuta:

Congratulations on your retirement!

Retirement is when life finally comes around and asks you to go on a permanent vacation. Even though you are retiring, the values and knowledge that you have imparted to your students will never retire. They will be sorely missed.

I can clearly remember that it was 2002 when I first met you. You came to Urumchi with one of your student Misa and we spent a few days together. It was quite a tour. But, I could not talk much because of my poor Japanese.

From 2003 to 2007, you were my teacher as well as my wife's. You are a truly kind, caring and remarkable person. In classroom we saw you as serious teacher where after class you were a humorous and funny. I was impressed by your knowledge about your specific subject and by your personality. Under your teaching and influence, I finished my studies successfully in Japan.

The impact that you had on me was inexplicable. I will never forget all that you have done and all that you taught me. I respect you and admire you so much.

You care about every student and you were able to see the positiveness in every one of them. You have always tried to motivate and inspire students but more importantly, you were extremely personable and willing to allow students to express their opinions and accept diverse views from different cultural backgrounds.

Your students like you not only because you are an excellent teacher, but because you reflect your personality in your teaching and do everything on average. You look to each students as if they were an equal; never redly looking down on them, teaching them with respect.

We will never forget you. You will forever remain

in our memories.

We wish you a happy retirement and best wishes as you heads into your next adventure.

Kind regards, Your students: Jiasuer Mijiti and Saideding Aibibai (Living in Adelaide, South Australia now).



台北市・総統府前にて(2008年2月)
洪 明真氏提供

古田先生の日頃の観察力

2010年修了 洪 明真

来日して1年が経った2005年、学部時代の S 教授(韓国・釜山・新羅大学)が日本の姉妹大学であった東京学芸大学に1年間交換研究者として来られたという知らせを、友達からもらいました。それで、当時住んでいた横浜から武蔵小金井へ挨拶に伺いましたところ、学部時代の S 先生の隣に国籍不明の中年男性がひとりおられました。その方は、学芸大学の古田先生でいらっしやると紹介されました。大学教授といえ、韓国では権威がある職業であるため、社会的に高い地位に相応しい服装をするのが普通でした。しかし、スニーカー、青いジーンズ、灰色のダウンパーカー、長髪の外見は、当時私の大学教授のイメージとは懸け離れたユニークな姿でした。自由な服装から古田先生は、穏やかで気さくな人柄の方かと思いきや、非常に厳しく

常に怒りを発散する怖い方でした。

2005年に入学してから2010年修了まで古田先生とお付き合いさせて頂いて、実に驚いたことがあります。学芸大北門周辺に古田先生の行きつけの焼鳥屋があり、先生と二人きりで飲むこともやっとな慣れてきた頃(2009年)の話です。

その日、古田先生が珍しく機嫌が良くほろ酔い気分の優しい声で「ホンさん！右手も良く使うじゃない？」と問いかけられました。私は、自分の耳を疑いながら、やはり先生酔っぱらったと思いました。「先生！私は右利きです。」と答えたら、先生は「あの時、左手でハサミを持ったじゃない？」と反論なさいました。

「あの時」といえば、2008年1月、某先輩が修論提出の〆切時間30分前までサンシャイン8階資料室で、修論のコピー分を綴込表紙に綴じていた時のことでした。某先輩を手伝う際に左手でハサミを持ったことで、古田先生は私が左利きであると思ったそうでした。先生の疑いが晴れないようでしたので、私は「ハサミも、食事も、鉛筆も右手を使います」と加えて申し上げますと、さらに先生は「あなたは無意識の時、左手でハサミを取った。おそらく、幼かった頃に左利きを右利きに躰けられた」という仮説および論理を広げていきました。私は、古田先生の推測を否定するため、その場で韓国の実家に電話をかけました。事実確認の結果、三つのことがわかりました。

一つは、自分は両手利きということ、二つは、社会で不便が生じないように、鉛筆を持つ時と食事をする時は、右手を使うように躰けられたこと、三つは、生まれてから古田先生が指摘なさるまで、自分だけ両手利きの認識が全くないまま生きてきたことです。この鋭い観察力は、日頃先生の歴史地理学に対する研究姿勢がわかる話ではないかと考えております。

最後ですが、日本文学が専攻であった私は、

初めて参加した古田先生の日本橋巡検(2005~2006年冬推定)のお蔭で、歴史地理学に興味関心を持つようになり、今や自分の博士論文の研究テーマにも繋がっております。私を歴史地理学へ導いて下さった古田先生に心より御礼を申し上げます。「私は、導いてない!」、「外見で人を判断するな!」とおっしゃる古田先生のお顔が、今、浮かびます…。



学位記授与式にて(2008年3月)
洪 明真氏提供

古田先生のご退職にあたって

2012年入学 植村 勇斗

この度はご退職おめでとうございます。そして長い間お勤めご苦労様でした。古田先生はとてもメリハリがあり、学業に対しては真摯な姿勢で向きあい、それ以外の面では場を和ませ、気さくにコミュニケーションを取っていただけた先生でした。ゼミ活動や巡検では時には厳しい言葉での指導を受けたりもしましたが、ゼミの後に恒例となっているコンパでは大富豪やナポレオンといったトランプゲームや、マジックの披露などで場を盛り上げていただきました。巡検や授業では各学生の出身地をよく覚えていて、各学生の出身地に関する話などをよくしていただき、当たり前なのですが、先生は「地理学のプロ」であると、感心していました。また、

巡検後には学生たちを古田先生お気に入りの「さくら水産」に連れて行ってもらい、学業のことからプライベートの話などをして、より交流を深めることができました。

私個人としては、古田先生とは特に3年生以降に歴史地理ゼミの活動や巡検、卒業論文の指導などで非常にお世話になりました。特に卒業論文やゼミでの指導では、わかりやすく丁寧に訂正箇所を指摘していただき、またその後にご修正するかなど細かく指導していただきました。その甲斐もあり、少しずつ論文の調査や執筆が進み、円滑に調査を進められたのではないかと思います。また、就職活動を終了したことを報告した際には、「これで卒業論文に集中できるね」と釘を刺されましたが、笑顔で労いの言葉を頂いたのをいまもよく覚えています。本当にありがとうございました。

ご退職を迎えられて寂しくもありますが、本当に長い間お疲れ様でした。これからも大好きなお酒を楽しみながら、くれぐれも体調にはお気をつけて古田先生らしく元気にお過ごしください。また、お会いできる機会を楽しみにしています。これまでのご指導ありがとうございました。

「四女」から古田先生

2015年大学院入学 大西 真由

私は「四女」として東京学芸大学に入学しました。日本女子大学文学部史学科の伊藤寿和研究室から学芸大学に来た学生を、古田先生は姉妹のように「長女」「次女」「三女」「四女」と呼びます。上の姉たちはきっちり二年ごとに学芸大学に入学し、「三女」の渡邊春華さんで日本女子大学から来る学生は最後の予定だったようです。退職まで残り一年の所を私が滑り込み、古田先生にとって予定外の学生になりましたが、末っ子として大変お世話になりました。

古田先生との思い出は、巡検と普段の研究指導が一番印象強いです。史学科に所属していた自分にとっては巡検自体がとても新鮮で、都内の富士塚巡検や、玉川上水巡検など、非常に興味を掻き立てられる内容でした。史料と向き合って、机に齧り付くことだけが研究ではないことを肌で感じることができ、歴史地理学としての一つの醍醐味も見出すことができました。また、私の地元を巡検先にしてくださったことがあったのですが、十数年住んでいて知らなかった事もあり、地元の新たな一面を認識しました。その巡検から地元について関心を持ち、個人的に調査を続けています。学生の関心を高めさせるような指導をしてくださり、教員を目指している自分にとっては古田先生から学び取ることが多くありました。

普段の研究指導もとても丁寧で、今後何をしたいら良いか、簡潔に的確なアドバイスをして頂きました。先生のご指導があつて成り立った研究はいくつもあります。初めて学会で発表を行う際も、緊張したのですが、古田先生が見てくださっていることが自分の安心に繋がりました。厳しくも優しい指導をしてくださり、先生には感謝の気持ちばかりです。ご指導の後は決まってご飯に連れて行ってくださるのですが、学生との飲み会を悦びとしている古田先生が、私はとても素敵だと思っています。

TA をさせて貰った伊豆大島巡検で「ブラタモリ」を見ながら美味しいお酒を一緒に飲んだ事や、渡嘉敷島でのゼミ合宿、ゼミ内にトランプのナポレオンを流行らせた事など、古田先生との思い出は数えきれません。優秀な姉たちに負けないよう、「四女」として努力してきましたが、大学院生活を研究面でも生活面でも充実させることが出来たのは、古田先生のお陰でした。本当にありがとうございました。古田先生の最後の学生になれたことは、私の誇りです。



泊江市・六郷用水取水口にて(2015年6月)

天野宏司氏提供

古田悦造先生のご退職に際して

2015年卒業・2015大学院入学 高 晨

私にとって古田先生との出会いは、すなわち歴史地理学という学問との出会いでした。

もともと学芸大学の学部生であった私は、古田先生の所属されていた日本研究教室の学生でした。高校では世界史を選択し、大学では日本文化について学ぶつもりだった私にとって、地理学という分野はあまりなじみがないものでした。地理学基礎論、方法論と地理学についての基礎を古田先生に直接指導していただいたことは、今となっては貴重な経験だったと感慨深く思います。しかし、正直に言って地理学という分野にあまり興味のなかった私は、あまりいい学生であったとはいえなかったでしょう。

学部の3年生になって、古田先生の歴史地理ゼミに所属することになったことは、大げさでなく、私の人生の中において大きな転機となったといえます。興味のあるなしに関わらず、私は地理学に向き合わざるを得なくなったのです。今思えばそこで初めて、古田先生が地理学の中でも歴史地理学という分野で研究されているということに気がついたのでしょう。そして幸いにも、歴史地理学という学問は私にとって非常に面白みのある学問でした。歴史と地理、

時間と空間という2つの軸をもって研究するということは、私にとって大変に衝撃的なことだったのです。

古田先生とはどういう先生だったか。学部の同期や卒業生、ゼミのOBなどに聞いてみればいろいろな回答が得られるでしょう。怖い、厳しい先生だったというような意見もあるかもしれませんが、少なくとも私にとって古田先生という人は(甚だおこがましい意見ですが)、実に学生思いの先生で、真摯に研究に向き合う根っからの研究者であるように思います。元々研究にも地理学にも興味がなく、大学院に進学することなんて考えてもみなかった私が、現在大学院生として歴史地理学を専攻し、研究していることがその証拠ともいえるのではないのでしょうか。有り体に言えば、今の私があるのも古田先生のご指導あってのことなのです。お酒の席などで語られる先生の経験談や研究者、教育者としてのあり方、考え方には考えさせられることが多分にありました。日々、研究室で研究者として研究し、教育者として学生に指導されている古田先生の姿を拝見できなくなることは誠に残念ではありますが、先生の益々のご健康を祈念いたしますと共に、我々後学への変わらぬご指導を心よりお願い致します。

「同僚」としての古田悦造先生

1997年修了・東京学芸大学教員 橋村 修

私は、1995年から97年まで歴史地理ゼミで院生としてお世話になりました。その頃は、院生の天野さん、金子さん、川名君、学部生や2~4名くらいの韓国人留学生がいて、少人数ながらにぎやかなゼミでした。ゼミ後に大学を出て、正門近くでタクシーを拾って小金井の「みつや」に流れるコースだったことを思い出します。院生の我々に対する先生の口癖は「ペーパーを書

け！トイレトペーパーじゃないよ！」だったかと。学会報告と学会誌投稿を奨励されていました。先生のご家族も参加されての奈良・京都合宿も印象深いです。そのころの思い出も多々ありますが、ここでは2010年4月以降、私自身が学芸大学の日本研究教室で古田先生と学生教育を共にする機会を得ていますので、それ以降の「同僚」としての思い出を書かせていただきます。

私は学芸大学の地域研究分野（古田先生所属の地理学分野とは異なる）、学部生教育組織 K 類（国際理解教育課程）日本研究教室（民俗学関係担当）に着任しました。当時の日本研究教室の担当教員は、古田先生、藤井健志先生、岩田重則先生（現 中央大学教授）、水津嘉克先生、そして私でした。私の着任初年度は古田先生が日本研究教室主任で大変お世話になったことをおぼえています。

日本研究教室の行事としては、4月の在校生・新入生ガイダンス、新入生歓迎行事、7月の4年生卒論中間報告会、1月の4年生卒論口頭試問会、2月の3年生卒論構想発表会、そして3月の卒業式があります。4月の新入生歓迎行事は、大学周辺の巡検とその後の茶話会というスケジュールで、古田先生が毎年企画してくださいました。西国分寺駅から古代道路跡や国分寺の遺跡、国分寺崖線の湧き水を歩くコースが多かったです。古田先生は速足なので、いつの間にか一行が先生を見失うこともありました。ちなみに古田先生の学部や大学院の授業では、都内各所や遠方（関西や初島、伊豆諸島など）の巡検プ

ログラムがとても充実しているそうで、学生たちに好評だったようです（解散場所には某飲み屋チェーンが必ずあるとのこと）。私も神津島や式根島をご一緒しましたが、船内から島々や海を眺めながら語る先生は、大学でのお姿とは一味もふた味も違うように思いました。

卒論関係の報告会での古田先生のご指摘、質問は、体裁から内容に至るまで、とても厳しくも親身でした。卒論行事後の教員会議では、先生から率直な意見をうかがうことができ、私も指導方法を反省させられました。歴史地理ゼミでの先生のご指導は、データ収集から分析、視点の提示まで、とても丁寧で親身な印象で、先生を慕う学生も多いようです。先生とご一緒する機会が増えて気づいたのが、学生に対する「指導教員だれ？」、教員間での「おーい、教室主任！！」といった先生の口癖でした。

最後に研究の話少し。古田先生は小栗宏先生、斎藤毅先生という東京学芸大学の海や漁業の地理学研究の伝統を受け継がれている先生だと思います。私は、学生時代に縁あって漁業地理学の柿本典昭先生を古田先生に紹介していただきました。それ以来、柿本先生には大変お世話になり、私が学芸大学に着任以降、柿本先生の亡くなる2012年まで、古田先生といっしょに柿本先生によくお電話をして、ご指導をいただいたことも思い出となってしまいました。

古田先生には、今後とも学芸大学のことのみならず、海や漁業、さらに歴史地理学全般の学問領域へもご指導賜りたくお願いいたします。



古田悦造先生還暦のお祝い・演習室にて(2010年6月) 洪 明真氏提供

コ ラ ム

2015年8月15日、東京学芸大学名誉教授で東京学芸大学地理学会名誉会員である、青木栄一先生のお宅にお邪魔をし、お話を伺ってきました。

青木先生は、都留文科大学で、古田悦造先生の学部4年間を指導され、古田先生の卒業の年に、防衛医科大学校へ移られ、後に東京学芸大学に転任なされました(そこに古田先生は修士課程で在籍)。その後、古田先生が、東京学芸大学に助手として着任なされるため、恩師から同僚までをご経験なされた方です。インタビューは、1時間あまりに及びました。以下、その詳細です。

○青木先生の都留文科大学の研究室には米軍払い下げの折りたたみベッドがあったのは本当ですか？

→寝袋とセットで、研究室においてあり、通うのが面倒な時には、研究室に泊まった。最近まで両方あったが、今は寝袋しかない。

○都留文科大学時代、古田先生はアパートに、ブロックで本棚を作っていたと聞きますが、本当ですか？

→古田先生の部屋を訪ねたことがあるが、本当のことで、蔵書量は当時から多かった。筑波の部屋も訪ねたことがあるが、そこは足の踏み場もない程、本や資料があった。

○都留文科大学時代の「3年次の特論」で青木栄一先生の「地理学裏話が面白かった」と言いますが、そんな話をなされましたか？

→そんな話をしたのかなあ？東京教育大の先生方の論争話はした覚えがあるが、それを面白いと思ったかは知らない。

○都留文科大学で古田先生が受けた青木先生のある授業で「C」評価を青木先生が付け、あとからあれは「B」だったねえと仰ったのは本当ですか？

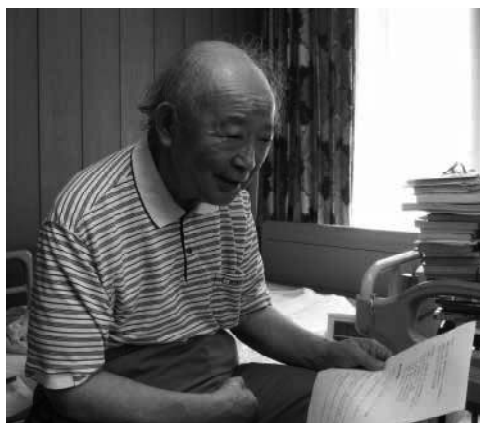
→覚えてないなあ。

○地理の学会に参加するという授業で、古田先生が寝ようと思っている所を、青木先生が隣に座り、延々清水馨八郎先生の人物紹介をした話は本当ですか？

→これも覚えていないが、確かに授業で、学会の発表を聞くようにという指導はした。

○修士に3年かかりましたが、古田先生はできの悪い院生だったのでしょうか？

→当時、私は大学院の担当ではなかったので「でき」の程は知らない。だが、3年いたことにより、恩師の小栗 宏先生が、学芸大学を定年退官するのと同じ時に、筑波大学の博士課程に移られたのは事実である。



インタビュー中の青木栄一名誉会員

(2015年8月)